

# 鎌倉研究における考古学の役割

## 第4回 鎌倉の考古学と伝世品

古田土俊一

発掘現場は現場見学会などを除き公開されていない。  
地上に残る石塔など考古学対象物の見方を紹介する。

### ◇鎌倉時代の地形を歩く

- ・縄文草創期～前期（約 6000 年前）の縄文海進による海面上昇で標高 15～20m の土地は海面下。
- ・縄文時代中期・後期の急速な海退期をむかえ、海岸線が砂丘となり、弥生前期にラグーンを形成。
- ・奈良・平安期にかけて徐々に海退し、中世鎌倉期は内海が残存する状態。 ※海拔 3.4m ほど高い。
- ・現在の一の鳥居付近が頂部となる砂丘の高まりが形成され、現在も残存する。
- ・滑川の流路は本来の流れを改変した痕跡があるため明確ではないが、砂丘の高まりを避けるかたちで内海に流れ込んでいたとみられる。内海から海へは材木座付近に河口があったと推定されている。
- ・古代の鎌倉郡家遺構出土 (①)、采女塚円墳 (向原古墳群) (②)、石槨墓 (③)、古代水運関連の倉庫か (④：元八幡付近)、郡家関連倉庫か (⑤：駅前)。
- ・このうち郡家地点 (①) は鎌倉時代に最大級の武家屋敷が建築される (御成小学校)。

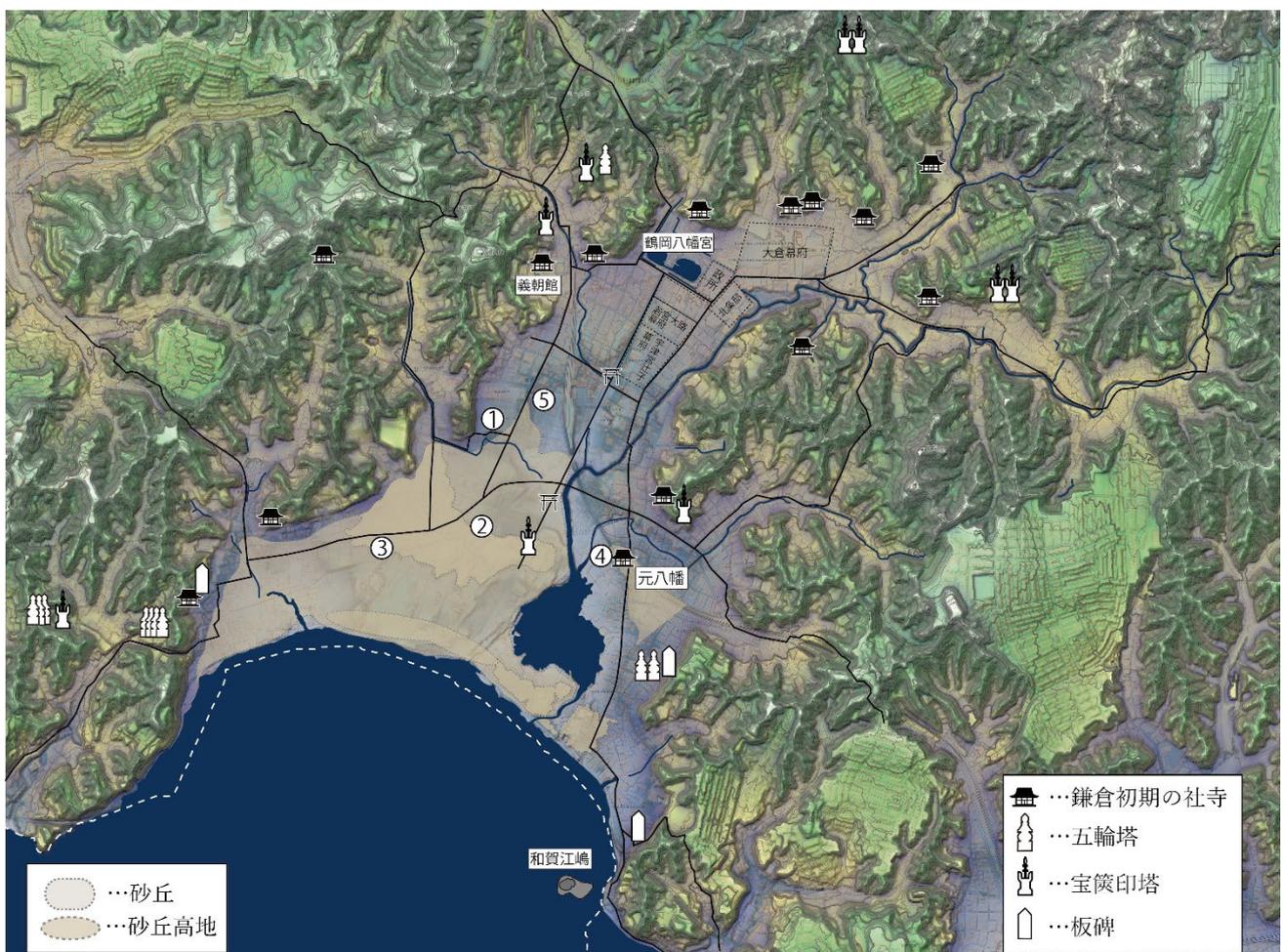


図 1 鎌倉時代の地形推定図

◇鶴岡八幡宮を俯瞰する

- ・康平6年(1063)源頼義が石清水八幡宮を由比郷に勧請した「由比の若宮」が始まりで、その子義家が修復を加え、治承4年(1180)源頼朝が同社を小林郷北山(現在地)の地に遷した。
- ・境内の発掘調査は1980~81年の直会殿用地、82~83年の研修道場用地、83年の鎌倉国宝館収蔵庫など一部のみ。ほか境内北西の谷(御谷・廿五坊跡地)、鶴岡文庫用地なども発掘される。
- ・**国宝館収蔵庫用地**…八幡宮造営(1180年)以前の墓が出土。造営時の土木作業の道具も出土。
- ・**直会殿用地**…八幡宮最初期の参道(若宮へ延びる)が出土。幅2mほどで中央が50cm幅で凹む。ほか『鶴岡八幡宮修営目論見絵図』天正19年(1591)に描かれた回廊が出土。近世に建立した大塔の礎石下の地業も確認。

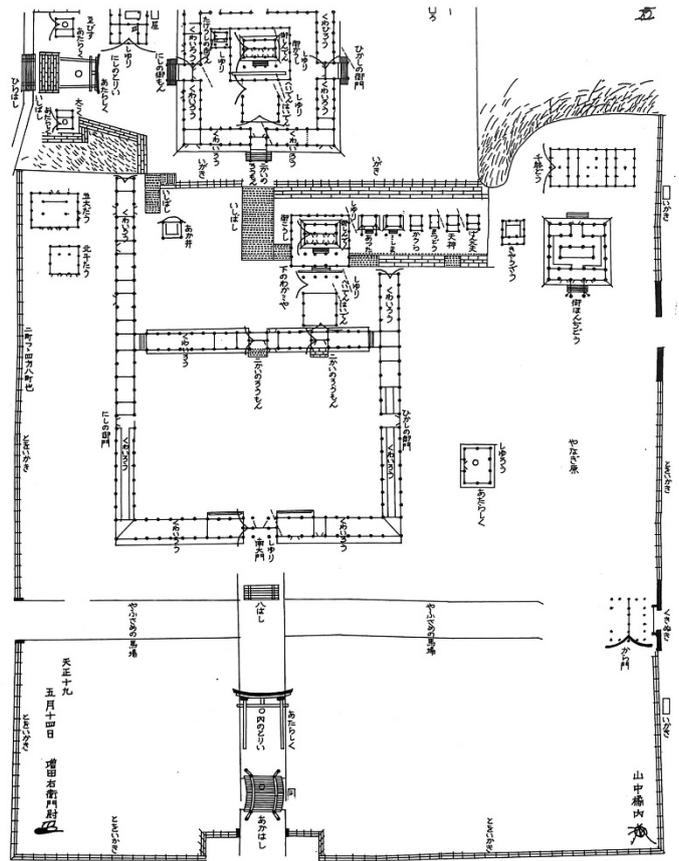


図2 鶴岡八幡宮修営目論見絵図(1591年)

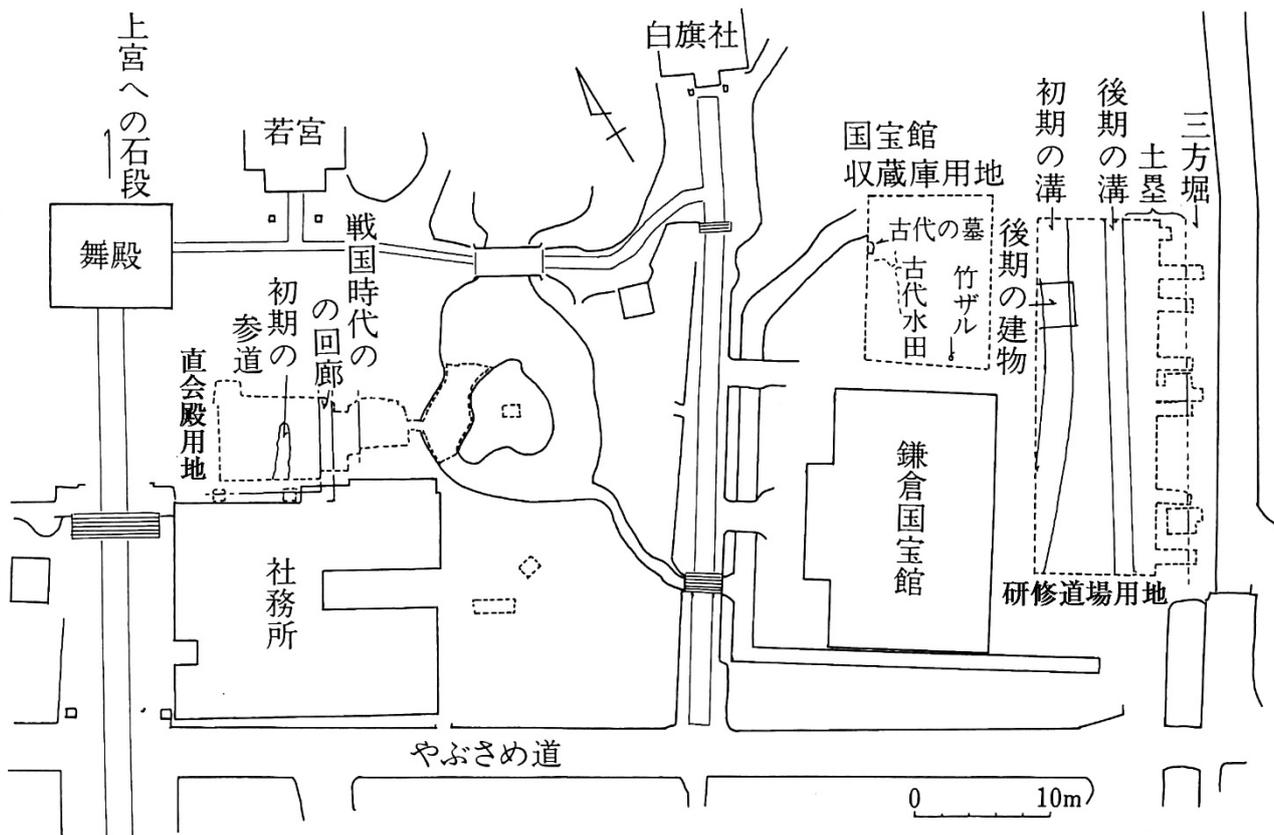


図3 鶴岡八幡宮の発掘調査地点

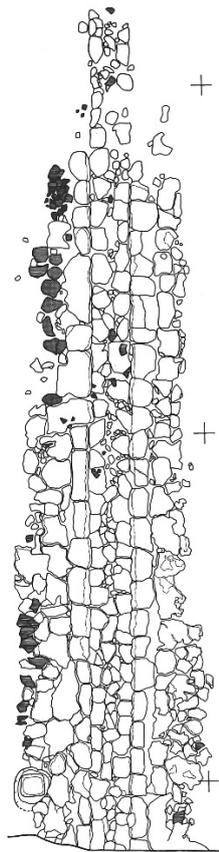


図4 若宮参道

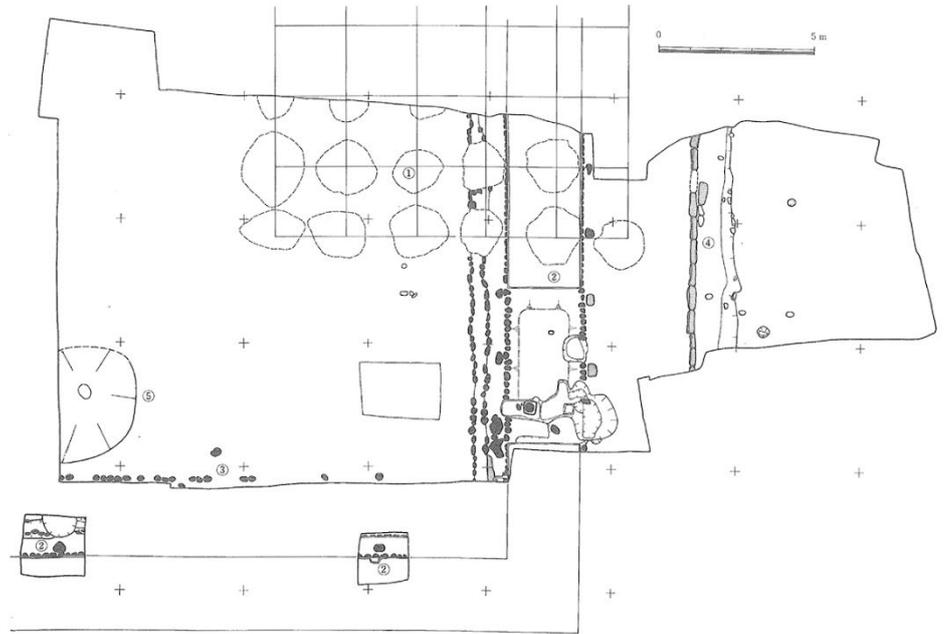
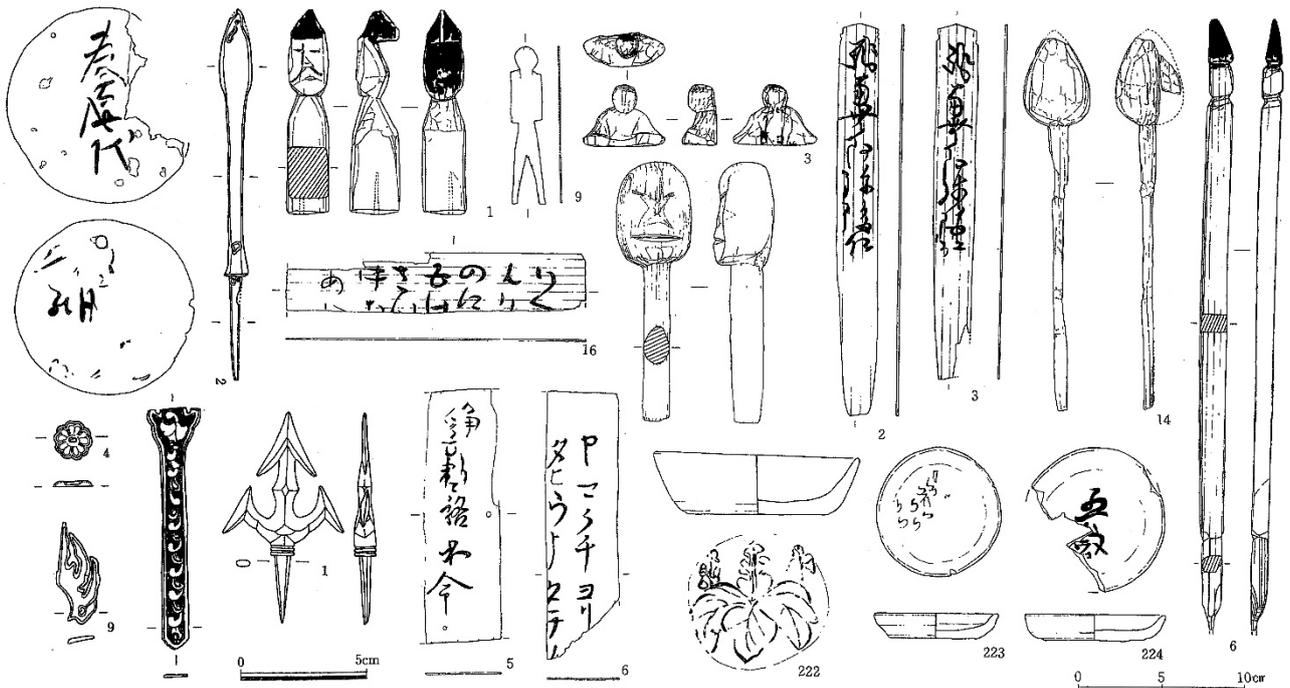


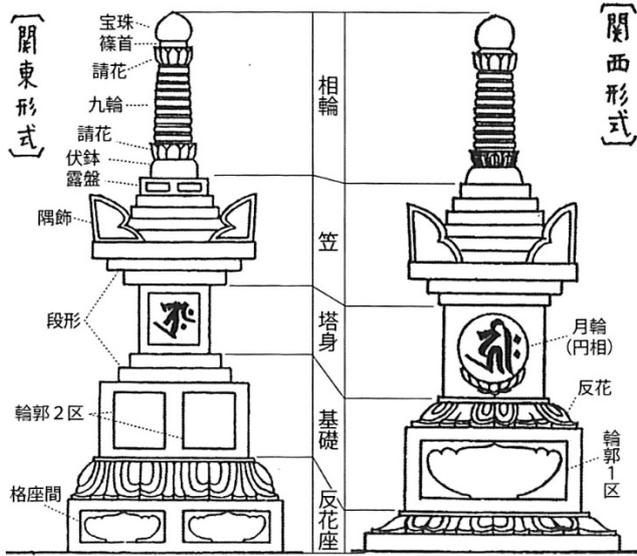
図5 戦国期の回廊と江戸期の大塔の基礎

・**研修道場用地**…最初期の東側の堀が出土。現在の東端線より 10m ほど内側に存在。幅 2.5m、深さ 60 cm の規模で、現在の石垣とは方向軸がズれる（南に行くほど西に曲がる）。→この曲がり方は現在の西の堀と並行する。→初期の八幡宮境内は平行四辺形（13 世紀中ごろに埋没）。のちの鎌倉時代中期ごろから現在の境内地に拡張されるとともに土塁が築かれ、何回にもわたって積み直しされている。土塁は幅 6m、高さ 2m 以上。境内三方を取り囲んでいたか。

・**出土遺物**に神道的要素はなく、仏教色が強い（形代類は呪術的）。→神仏習合の宮寺だからこそ。ほか数十倍の量の日常生活道具が出土（陶磁器・曲物・下駄など）。なかには魚鳥獣の骨も含まれるが、神社として穢れとなる肉食禁忌は見ぬふり？ ▼**図6 八幡宮出土の宗教遺物**

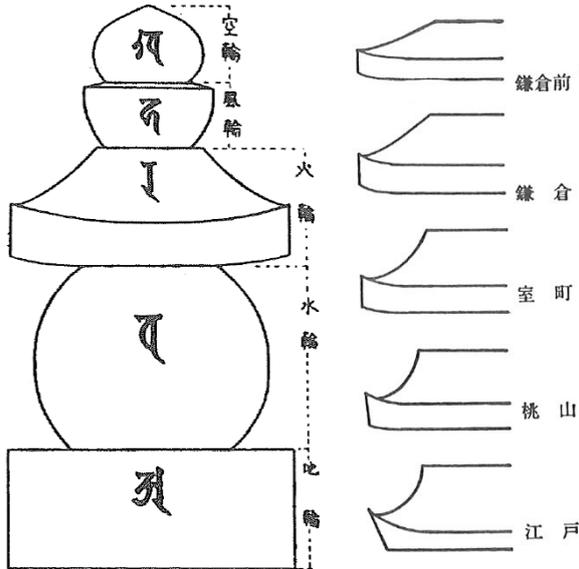
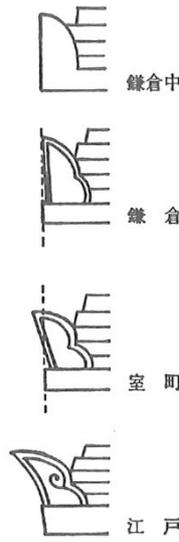


◇石塔を探す



○宝篋印塔

本来、『宝篋印陀羅尼經』を納入する塔。經の納入に関わらず、この形式の塔を宝篋印塔と呼称する。源流は中国。呉越王錢弘俶がインドの阿育王による八万四千塔造塔の故事に倣って金属製の塔を各国へ送ったのがはじまりとされる。川勝政太郎の提唱する「關東形式」「關西形式」がある。最古例は京都府旧妙真寺塔、高山寺塔など。神奈川県最古例は箱根塔。



○五輪塔

空・風・火・水・地の五輪で構成される塔。大日如来の三昧耶形として造立。日本で石造化。舎利信仰。最古の例は岩手県平泉釈尊院の仁安四年(1169)塔。「西大寺様式五輪塔」と呼ばれる大型の塔が存在。神奈川県最古銘は箱根虎御前塔。つづいて鎌倉極楽寺忍性塔。

○年代判定の方法

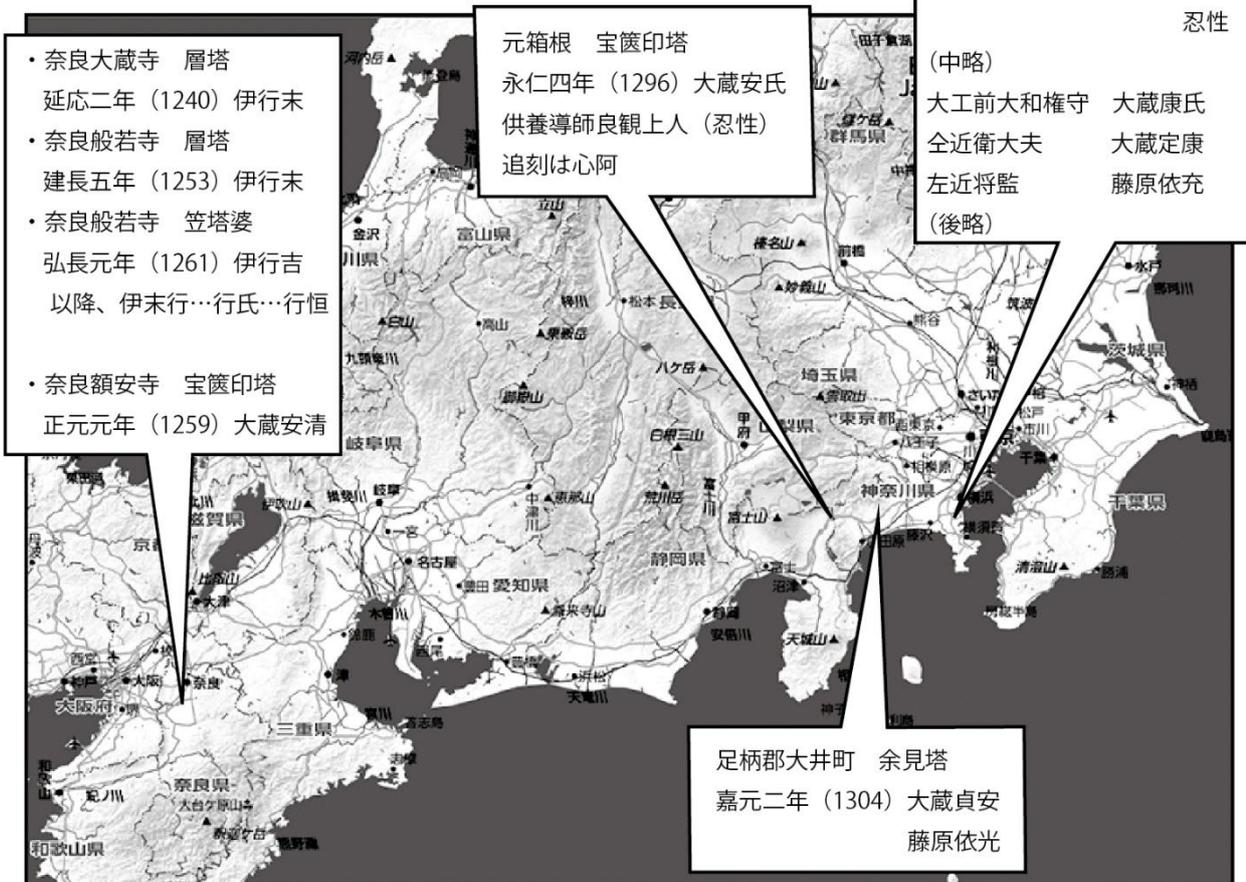
紀年銘や石材も含めて考古学的な型式から判断する。型式は全国編年のほか、地方色を加味する必要がある、各部材の様相を総合し、塔の年代を判断する。銘文の判読には拓本が有効で、3D計測も用いる。

		1280	1290	1300	1310	1320	1330	1340	1350	1360	
		..... 複弁Aa.....		..... 複弁B.....		..... 複弁Ab.....		..... 複弁C.....		..... 複弁D.....	
反花型式	単弁 A	単弁 B		単弁 Ab		単弁 C		単弁 D			
弁数	5	3・4		3・4・(1・2・5・6)						2	
格座間		有り								無し	
単弁 A	重弁・框無し	称名寺 B1 (推定 1301)		称名寺 A5							
単弁 B	重弁・框有り	六国見山 (14c 初)		英勝寺 (14c 前)							
複弁 A	重弁・框無し	a 称名寺 A2 (13c 第4)		b 称名寺 A3 (14c 第1)							
複弁 B	重弁・框有り	名月院 (14c 初)		安養院 (1308)							
複弁 C	重弁・中央寄 框有り	無量光寺 (1344)		千手院 (14c 第2)							
複弁 D	素面・框有り	a 上行寺 (1352)		b 由比ヶ浜 (1393)							
		c 養竹院 (1522)		d 小田原市大久寺宝塔 (1594)							

反花座の変遷

## ○石造物の導入（13世紀後半～）

- ・鎌倉の最古銘石造物は板碑で、導入時期は13世紀第3四半期ごろとなる。例として長谷寺の弘長二年（1262）銘の緑泥片岩製板碑、同年銘の光明寺、五所神社の雲母片岩製板碑があり、後者2基は本来同じ場所に一对で立っていたとの指摘がある。
- ・鎌倉の石塔の石材は、三浦層凝灰岩、伊豆・箱根系安山岩の2系統があり、伊豆箱根系の安山岩の鎌倉導入は13世紀後半からとなる。
- ・平重衡による南都焼き討ち（治承四年〔1181〕1月）から東大寺復興（同年4月）がはじまり、宋から石工を招聘。→以降、奈良に宋人石工が定住し畿内で石塔を造立（伊氏）。→同じ系譜とみられる大蔵氏が西大寺・忍性とともに関東へ下向。→鎌倉へ石材加工技術が導入される。



宋人石工による畿内から東国への石造物造立の流れ(石造物銘文・文献史料から)

## ◇まとめ

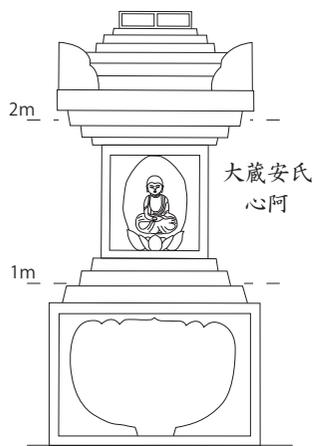
- ・鎌倉考古学の成果は日々蓄積され、文献史料に残らなかった様々な史実を明かにしている。
- ・発掘現場に立ち入ることはなかなかできないが、鎌倉には考古学視点での歴史の痕跡が点在している。
- ・鎌倉市は人口に比べ膨大な文化財数を抱える全国でも特異な自治体。それゆえの学芸員不足は問題。

## 参考文献

- 川勝政太郎 1967『石造美術入門』社会思想社  
 山川均 2006『石造物が語る中世職能集団』山川出版社  
 本間岳人 2012「南関東」『中世石塔の考古学』高志書院

鎌倉の宝篋印塔  
五輪塔

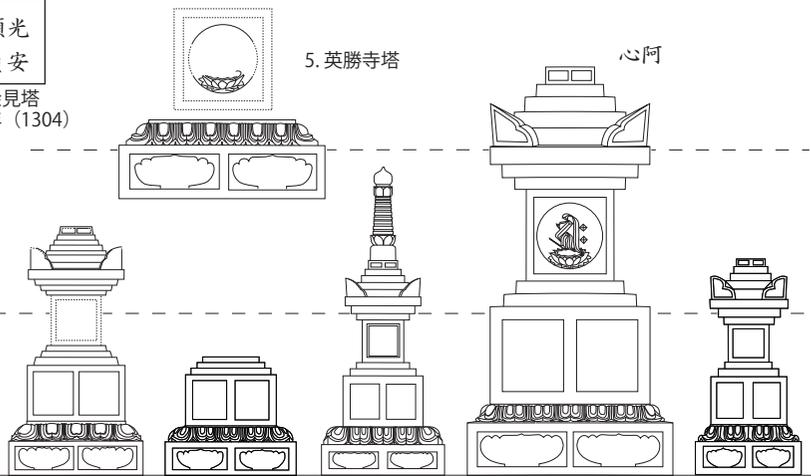
1300



元箱根塔  
永仁四年 (1296)

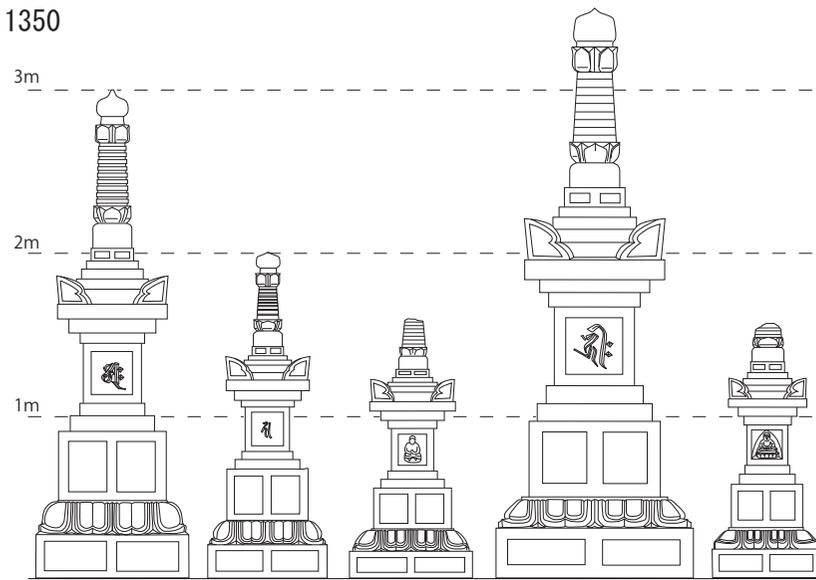
大蔵安氏  
心阿

藤原頼光  
大蔵貞安  
大井町余見塔  
嘉元元年 (1304)

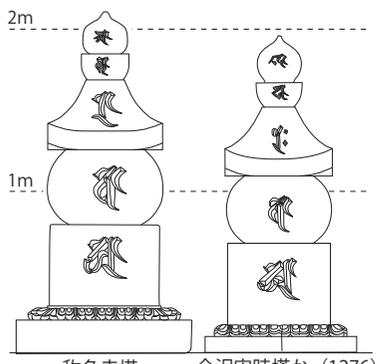


1. 六国見山塔  
3. 浄妙寺残欠塔  
4. 明月院塔  
6. 安養院塔  
7. 浄光明寺塔  
5. 英勝寺塔  
心阿  
徳治三年 (1308)

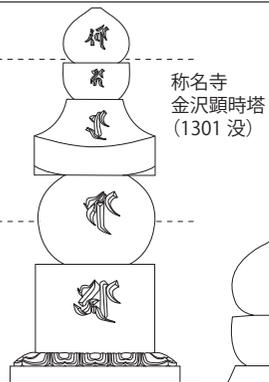
1350



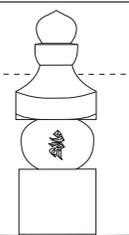
8. 上行寺塔  
9. 立き塔  
10. 浄妙寺塔  
11. 伝島山重保塔  
12. 北野神社塔  
文和元年 (1352)  
文和 5 年 (1356)  
明徳三年 (1392)  
明徳四年 (1393)  
応永十二年 (1405)



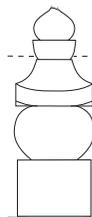
称名寺塔  
金沢実時塔か (1276)



称名寺  
金沢顕時塔  
(1301 没)



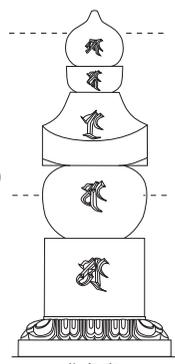
逗子 東昌寺塔  
乾元二年 (1303)



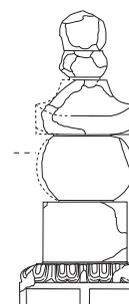
極楽寺延慶塔  
延慶三年 (1310)



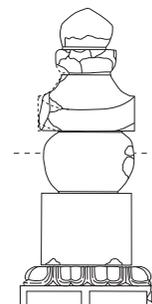
銭洗弁財天塔  
元徳二年 (1330)



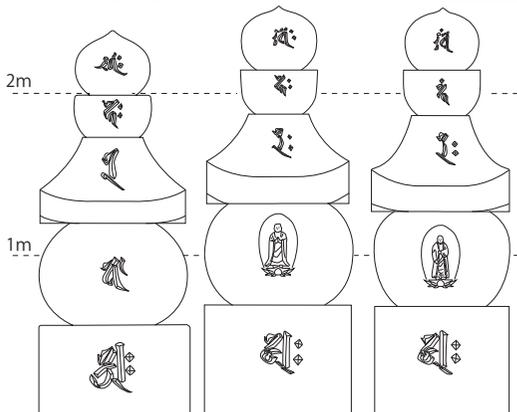
称名寺  
金沢貞顕塔 (1333 没)



来迎寺  
伝三浦義明塔

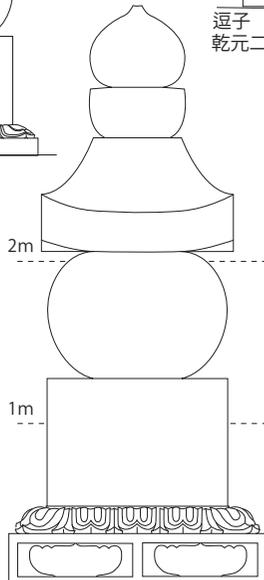


来迎寺  
伝多々良重春塔

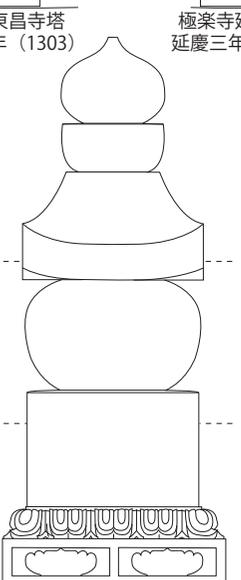


元箱根虎御前塔  
永仁三年 (1295)

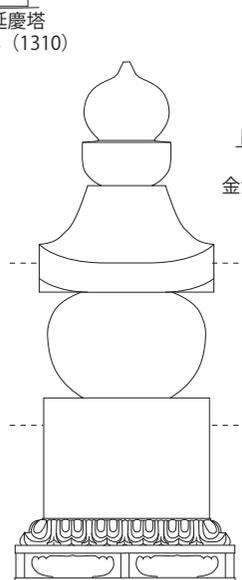
元箱根曾我兄弟塔



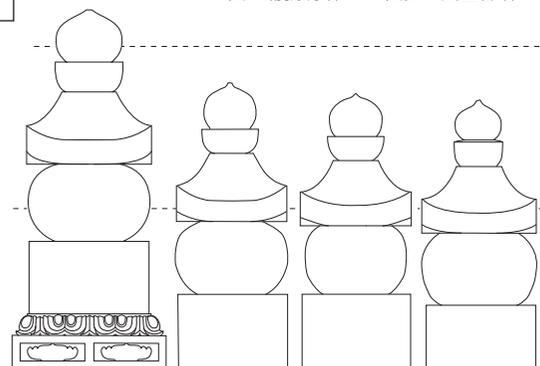
極楽寺忍性塔  
嘉元元年 (1303)



極楽寺順忍塔  
嘉元元年 (1326)



多宝寺覚賢塔  
嘉元元年 (1306)



西方寺跡塔  
貞治七年 (1368)

西方寺塔